

# しまねの社会教育だより

島根県立県部社会教育研修センター  
vol. 33  
島根県立県部社会教育研修センター

- 家庭教育支援のさらなる充実を目指した「親学プログラム」のアレンジ例の紹介
- 学びがチカラに!! [吉賀町社会福祉協議会 澄川 恵美子さん]
- わがまちの社会教育の実践紹介 [飯南町・江津市]
- つながる ひろがる“わ” [雲南市]

2021.9月号

## ■ 特集 社会教育委員インタビュー

～これからの「しまねの社会教育」に期待すること～

### 山崎 瑞穂さん

- ・島根県社会教育委員
- ・フリーアナウンサー
- ・元 大田市立温泉津公民館主事
- ・「親学ファシリテーター」

### 有馬 毅一郎さん

- ・島根県社会教育委員
- ・島根県社会教育委員連絡協議会 会長
- ・松江市社会教育委員
- ・松江地区社会教育委員連絡協議会 会長

今回の対談は、今期より新しく島根県社会教育委員に就任された山崎瑞穂さんと、長きにわたり島根県社会教育委員の会会長をお務めの有馬毅一郎さんに、社会教育に対する思いを語っていただきました。

## つながりづくり ～ 公民館主事として～

[有馬] 山崎さんは温泉津公民館主事としての勤務経験をお持ちですが、勤務を始めたころに苦労されたことはありませんでしたか。

[山崎] 私は主事になるまで、社会教育の経験がありませんでした。ただメディアに関わる仕事をしていたので、人や地域との新たな出会い、町の活性化にはとても興味や関心がありました。温泉津町は以前取材したことがあったので、少し知識はありましたが、勤務を始めた1年目は、とにかく温泉津町内の4つの地区を回って顔を出す、自治会や学校単位などのイベントに参加し、公民館を知ってもらうことくらいしかできませんでした。

[有馬] 地域を知るために、自分から出かけていくことはとても大切なことですね。その中で、地域ならではの課題を感覚的にでも、あるいは具体的につかんで行動していくということは、私たち社会教育委員にも求められる重要なポイントでもあります。他に何か事業などで印象に残っていることはありますか。

[山崎] 印象に残っていることのひとつが、勤務初年度から実施した温泉津ブロックの「公民館まつり」です。温泉津町内の4つの地区はそれぞれが活発に活動されていましたが、町としての連帯感というか、横のつながりをつくっていくことが地域の課題だと感じていました。そこで、温泉津町全体で「公民館まつり」を開催して、地区の自慢のものを持ち寄り、発表していただきました。企画段階から各地区代表の方を中心に実行委員会を結成し、活動していただくことで、地区の垣根を越えたアイデアが集まり、底力、地域力を改めて実感しました。つながることで、互いを理解しあい、高めあい、学びを通して地域に一体感が生まれたあの時の喜びは、私の社会教育人生の原点です。

[有馬] そうですね。公民館エリアの中にはいくつかの特色がある地域がありますが、それぞれの特色を活かしながら全体としてのまとまりをつくり上げていく、「つながりづくり」という視点が必要ですね。主事としての勤務の中で、山崎さんが実際に体得されたことからのひとつであると思いますが、主事としての勤務経験が社会教育委員という立場に役立っている部分はありますか。

[山崎] 社会教育主事講習で学んだ中に、社会教育は学校教育以外の組織的な教育活動であるという内容があったように思います。つまり非常に広範囲で、年齢も赤ちゃんから高齢者まで様々です。学びの場を提供するという認識に立つと、やはり多くの分野、幅広い年代のたくさんの方々に参加していただきたい、そのための工夫を凝らしたいという思いがあります。地域課題解決に向けて、日々悩み、もがきながらも成長できた経験は大きな財産です。また、学校教育との連携では、「学校支援地域本部事業」に公民館が関わっていたので、自分自身の視野も広がったと思います。



[有馬] 地域と地域、地域と学校をつなげていく横のつながりづくり、そして、子どもから大人までをつなげていく縦のつながりづくり、この両方とも大切な要素なのですが、いずれも実経験しておられるのは、山崎さんの大きな強みであると思います。これからも大切にしてくださいね。

## 気づきの共有 ～ 親学ファシリテーターとして～

[有馬] 家庭教育支援を進めていくうえで、「親学講座」は戦略のひとつでもあり、とても大切です。親学ファシリテーターとして実際に活動されて、どんな課題を感じていますか。

[山崎] 私が親学ファシリテーターになったのは、自分がまさに妊娠中、母親になるといったタイミングでした。印象的だったのが、私が最初にファシリテーターを務めたときのことです。終了後、ひとりのお母さんが涙ながらに「ひとりで悩んでいたことを聞いてもらえた。それで大丈夫なんだよという雰囲気になされた」と話してくださいました。ファシリテーターは教える人でもなく講師でもありません。ひとりの親として一緒に関わっていくというスタンスを大切にしています。そして、親学の場合は、「自分と違った考えがあってもいいよね」とか「みんなもそう思っていたんだ」という気づきを共有する場です。これが魅力です。連帯感が希薄な時代にあって、子育てについて「共感する場」が必要とされていると実感しています。ただ、今まさに悩みや辛さを抱え、本当に参加してほしい方に参加していただけない、なおさら孤立されてしまうということがあるのではないかとこの不変の課題は、常に頭を悩ませています。

[有馬] これは家庭教育支援に限らず、社会教育の根本的な問題点であり、「ひとり残らず」、「みんなに行き届いて」を目指す中で、必ず向き合わなければならない課題でもあります。広くみんなに届いてという視点は、山崎さんの感覚やセンス、ご経験が大いに活かされる分野ではないかと思いますが、何か戦略はありませんか。

[山崎] 例えば待っているだけではだめ。人が集まっているいろいろな場はこちらから出向いて、求めている人を探ることが大切だと思います。公民館など社会教育施設だけでなく、あらゆる場所がフィールドで、野原や公園でもいいのではないかと思います。これも「見える化」のひとつだと思います。

[有馬] 先ほど山崎さんが言われた「出向くこと」、「求めている人を探ること」。これはとても大切な姿勢であり、公民館職員、親学ファシリテーター、社会教育委員のいずれにも共通するポイントですね。情報提供の視点から、何かありませんか。

[山崎] メディア、SNS など今や情報を伝える手段・方法は、たくさんあります。ただ、親学を実践する上でも感じるのは、「味方を増やすこと」の大切さです。届けるべき人に適した手段を駆使した広報活動と同時に、実際に参加してくださった方の「楽しかったよ」、「一緒に行こうよ」というポジティブな口コミや噂が一番効果的だったりします。

## 行動する、伝え合う ～ 社会教育委員として～

[有馬] 今、「行動する社会教育委員」という言葉があります。山崎さんがこれから頑張りたいことについて聞かせていただけたらと思います。

[山崎] 社会教育委員という大きな看板はまだ背負えてないのですが、せっかく親学ファシリテーターとして社会教育委員に所属させていただいているので、家庭教育支援ということで、まずは、親学の実践をさらに積み増したいと考えています。あの場には、様々な立場の方がおられます。それぞれの見識に触れる中で、自分のしていることが必要とされていること、意味があるのだと認識できることが自分自身の活動の原動力につながっているからです。

[有馬] 親として、地域住民のひとりとして、「一緒に考えたい、共有したい」と頑張っておられるそのエネルギーは、社会教育においても大きな力になると思います。他に感じておられることはありますか。小さなことでかまいませんよ。

[山崎] この1年は、知識・情報を吸収する1年だったので、次の1年は、何かしら提言できるようになりたいです。また、社会教育委員の任期を終えた後でも、地域の中で、また友人同士で社会教育の魅力を伝え合い、実践できる人でありたいと思います。

[有馬] 地域の住民一人一人が、公民館主事や親学ファシリテーターや社会教育委員のような視点を持つようになればいいですね。そのためにも、まず私たちが頑張っていかなければいけません。山崎さんのようなやわらかい発想から提言いただけるとありがたいです。島根県には社会教育委員が224人、全国では2万人が活躍しています。何かメッセージとして発信するとしたら、どんなことがありますか。

[山崎] 社会教育委員として学ぶ機会をいただいたことで、これまでの地道な活動が、意義のあることだったと確認することができましたし、人とつながる機会をいただきました。それを無駄にしないよう、まだまだ未熟ですが「行動する社会教育委員」であるために、今後もいろいろなことに対して興味・関心を持って1日1日を過ごしたいと思います。

[有馬] 先般の社会教育委員の会において「しまねの社会教育で大切にしたいこと」※という方向性が示されましたが、何か感じられたことはありましたか。

[山崎] 当時、公民館主事としての勤務の中で思っていた「すぐに結果がでるものではないこと。いつか実を結ぶと、可能性を信じてやり続けていいこと」が示されていて安心しました。私が今できることを、例えば親学ファシリテーターだったら、時間をかけてゆっくり地道に丁寧に活動しながら、広めていければと思います。それと先ほどから出ています「見える化」についても触れていただいている、自分の中ですっきりしました。「教育」と聞くと少し敷居が高く感じられますが、具現化して、やわらかく解きほぐして、社会教育が実は私たちにとって身近なものであることを、情報に携わる者としてわかりやすく工夫してお伝えできればと思います。

[有馬] 「しまねの社会教育で大切にしたいこと」について常に問題意識を持っていることが大切であると思います。社会教育では何をめざせばいいのか、社会教育委員として何をすればいいのか、地域のためにできることは何かをともに真摯に考え続けていきましょう。

[山崎] それぞれの立場できっと輝ける何かがあると思うので、私自身これからもそれを探し続けながら、めいっぱい楽しみながら活動していきたいと思います。

[有馬] 社会教育委員として、また、親学ファシリテーターとして、それぞれの活動を社会貢献のひとつとして、面白がって楽しみながら取り組んでいきましょう。今日は勉強させていただきました。

[山崎] いえいえ、恐縮です。そのようにおっしゃってくださる大先輩の懐の広さに感服いたしました。私もぜひそうありたいです。今日は大変貴重な機会をいただき、

ありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

※「しまねの社会教育で大切にしたいこと」は、島根県公民館連絡協議会のホームページ『しまねの社会教育BOX』<https://www.kenkoren.jp/>に掲載されています。



# 家庭教育支援のさらなる充実を目指した

当研修センターが“しまね学習支援プログラム”の第1弾として「親学プログラム」を開発して約10年になります。その間、第2弾として開発した「親学プログラム2」も加え、県内各地でご活用いただき、家庭教育支援の一つとして普及してきました。近年、親学に関する調査\*の結果から、内容をアレンジしたり、研修の持ち方を工夫したりしている実践が増えている実態が伺えます。今回は、次の4つの市町村の特色ある取組を紹介します。



\*調査『親学プログラム』『親学プログラム2』を活用した研修等の状況について

## 出雲市 “ほめる”も“しかる”もコミュニケーション

### “ほめる”ことって意外と難しい？

中部幼稚園の先生方と親学プログラムの打ち合わせを行っていると、「保護者さんからほめることって意外と難しいという話を聞くよね」「しかり方に合わせてほめ方についても語り合ってもらえる場があるといいね」という意見が挙がりました。

その声をきっかけに、親学プログラム4-③「しかる基準は？」をアレンジして、「しかる基準は？ほめる基準は？」というタイトルで、ワークの流れやワークシートの内容を検討していきました。出雲市親学ファシリテーター連絡会では、アレンジ内容の事前演習をしながら、本番に向けて意見交換を行いました。



### これからの関わり方を見つめ直す

研修会当日、ほめる場合は、「描いた絵を持ってきて、アピールしてきた」「近所のおじさんに自分から挨拶をした」など4つの場面を想定し、ほめ方についても意見交換を進めていきました。保護者からは、「ほめるものも、まずはコミュニケーションが大切だ」「自分の心に余裕を作り、日々の会話の中から我が子の良いところを見つけていきたい」などという声が届きました。

保護者の実態を踏まえて「しかり方」に加え、「ほめ方」をテーマにしたプログラムを展開することで、より前向きに子どもに関わっていこうとする気持ちを高める機会となりました。

「ほめる基準は？」ワークシート【幼稚園用アレンジ】  
下記の項目について、あなたなら我が子にどのようにかわかるかを考え、A~Eでランクをつけてください。

子どもの様子	あなた
①近所のおじさんに自分から元気よく挨拶をした。	
②自分でかいた絵をもってきて、うれしそうに「上手でしょう！と、アピールしてきた。	
③子どもを迎えに来た時、先ずから「今日は、お手も、いを込んでくれてありがとうございます」と言われた。	
④迎えに来た時、困っている（泣いている）友達に優しく声をかけている姿を見かけた。	

## 知夫村 島留学の県内外親同士のつながりづくりに

### つながる場を設けたい

知夫小中学校では、島留学を希望する子どもを県内外から受け入れています。これまで、子どもたちの親同士が一堂に会することができる春、親同士のつながりづくりや子どもたちを預かる寮のハウスマスター（寮スタッフ）との関係づくりのために、親学プログラムを活用し顔合わせ会をしてきました。

ところが、昨年度はコロナ禍のため、顔合わせ会ができませんでした。そこで考えたのが、オンラインでの顔合わせ会。オンラインで親学プログラムをやってみることで話が進み、ハウスマスターと教育委員会で実施時期やプログラム内容の検討を重ねました。



### オンライン交流！いろいろ

昨年は、時期は遅くなりましたが、9月に「帰省した我が子の成長や変化」をテーマに、フリップを使ってオンライン親学を行いました。離れて暮らす我が子の成長に対して、親同士がお互いの喜びや不安を分かち合うことができました。

さらに、今年の春には、子どもと一緒に「島留学で大切にしたいこと（してほしいこと）」をテーマに、総勢20名のオンライン親子懇親会を行いました。親からの期待の声を聞き、照れながらも喜んでいる子どもの姿も見られました。様々な思いや願いに触れることで、一人一人の考えを共に大切にしていこうとする場になりました。

帰省時に、港で抱き合って再会を喜び親子の姿はもちろん、子どもの帰りを待つ間、初対面であるはずの親同士の弾む会話が広がっていたことも印象的でした。

帰省時に、港で抱き合って再会を喜び親子の姿はもちろん、子どもの帰りを待つ間、初対面であるはずの親同士の弾む会話が広がっていたことも印象的でした。

# 「親学プログラム」のアレンジ例の紹介

## 浜田市

### HOOP! (浜田親子共育応援プログラム) の取組

#### 専門家のアドバイスも聞きたい!

浜田市では、小学校入学前の保護者を対象とした親学プログラムの必要性から、独自の乳幼児期版プログラムを開発し、従来の「親学プログラム」「親学プログラム2」と合わせた「HOOP!」(浜田親子共育応援プログラム)を誕生させました。

新たに開発したプログラムには、「交流や活動だけでなく、専門家からの話やアドバイスも聞きたい」という参加者の声もあり、参加型学習の中で専門家の話を聞くアドバイスタイムを加えています。心の発達やメディア接触に関するプログラムでは、医師や保健師がアドバイザーを務め、参加者の疑問に答えながらより専門的な立場での話をします。参加者からは、「わかりやすい説明で説得力があった」という声が聞かれています。

HOOP! 浜田親子共育応援プログラム

乳幼児期・児童期の親(保護者)対象プログラム

#### 1. 親と子のコミュニケーション

- ① 大切だよね! 親子のきずな!
- ② 考えよう! メディアと子育て
- ③ やってみよう! 親子体感遊び
- ④ うちの子どんな子?  
~絵本を通して見えてくるもの~

#### 2. 小学校入学に向けて

- ① ドキドキ・ワクワク 小学生!  
(浜田市オリジナル親学プログラム)

#### ファシリテーターとともに新たなプログラム開発

昨年度浜田市では、家庭教育支援が各地域においてチームとして推進されるよう、モデル地区を設定しました。その1つの石見まちづくりセンターは、「家読」をテーマとした親学プログラムの開発に取り組みました。主事やファシリテーターらで何度も会議を重ね、絵本専門士としまね子どもの読書等推進の会の会員をアドバイザーとするプログラムを作り上げました。その後、市内の小学校で試行しながら内容をさらに充実させ、市内全体でも実践できるプログラムとなりました。このように、ファシリテーターや専門家、地域住民がプログラムの開発に関わっていることもHOOP!の特色の1つとなっています。



## 大田市

### 親子で参加できる、楽しい地域のイベントとして



色紙を手にして記念撮影

#### 親学での気づきを他の活動と結びつけ、見える形で表現

川合まちづくりセンターでは、「～子育てばんざ～い! 親のしつけは子どもへの大切な贈り物～」と題し、小学生保護者を対象に短い時間での親学を実施しました。まとめとして、それぞれが決めた「我が子に贈りたい言葉」を書の達人に指導を受けながら色紙に筆で書きました。

川合まちづくりセンターでは、「～子育て

#### 親子のつながりを育む

この日は、クリスマス会として親子での参加を呼びかけており、保護者が親学や色紙づくりをしている間に子どもたちは遊びのコーナーで楽しんでいました。親子が合流してから、色紙に子どもの手形を押し、クリスマス会の中で保護者が全体に見せながら贈る言葉とそこに込めた思いを紹介し、我が子へプレゼントしました。

楽しいイベントに親子で参加しながら、保護者が我が子への思いを見つめ直すとともに、その思いを我が子へ伝えるという一連の場を設定したことで、親学での学びをすぐに次の行動へとつなげることができました。周りの人達に見守られながら、親子の関係もさらに深まったのではないのでしょうか。

社会の変化とともに、家庭教育においても新たな課題が生まれ、県内各市町村では、「親学プログラム」のより効果的な活用や課題解決に向けた新たなプログラムの開発、家庭教育支援のための体制づくり等が進められています。これまでの様々な取組から、「地域ぐるみで子どもを育む」ことは、子育てだけでなく、地域づくり、つながりづくりにも有効であることが分かってきました。今後も「親学」がそのような役割の一つを果たすべく、幅広い場で活用されることが期待されます。

※紙面の関係で、県内の一部事例を紹介させていただきました。

# 学びがチカラに!!

社会教育研修センターの研修で学んだことを、地域や現場での実践に活かしていらっしゃる方を紹介します

## “参加型学習”をとおして人々の主体性を生み出す

吉賀町社会福祉協議会 総合相談支援所 澄川 恵美子 さん

吉賀町社会福祉協議会に、コミュニティソーシャルワーカーとして勤務しておられる澄川さん。昨年度、職場の上司のすすめで「ファシリテーター養成講座」を受講されました。この上司の方は、町の社会教育委員もされており、澄川さんの更なる成長を期待してチラシをおかれたのだそうです。澄川さんもちょうどその頃、立場の異なる人が集まる会議を進行する機会があり、何とかその会議を活発なものにしたいと思っておられたそうで、ファシリテーター養成講座に申し込まれました。



澄川さんと自身で生けたお花

### ■相手の思いや考えを引き出すために

町内35地区で行われているサロンのボランティアを対象とした研修会を年2回開催しており、これまではどちらかというと勉強会の形態で計画してきました。しかし、ボランティアの方々からいろいろな知恵やアイデアを引き出し、共有できる会にしたいと考えていました。

参加型学習は、自らの気づきや行動変容を促すことをねらいとしていると学びました。ファシリテーターとしてすべきことの多さに驚きましたが、ねらいや時間配分、ふるまい方など1つ1つに意味があり、大切なことだと実感しました。養成講座で企画したプログラムは、コロナの影響でまだ実施には至っていませんが、ぜひプログラムを体験してもらい、**みなさんが主体的に動き出すきっかけにしたい**と考えています。



研修会の様子

### ■子どもにとっても大人にとっても

小学校から公民館を通して「戦時中の体験を話してくださる方を紹介してほしい」と話がありました。候補となる方はたくさんいますが、高齢であるため、紹介する際に講師の負担も配慮し、複数名の講師のテーブルを児童のグループがローテーションする方法を提案してみました。養成講座では、いろいろな手法を学びました。**ねらいに向けて両者が楽しんで参加できる**よう、手法を選定することも大切だと考えています。

戦争体験をされた80～90歳代の講師の方たちのいきいきとした表情と、話に聞き入る子どもたちの真剣な表情が印象的でした。

### ■まわりの人を巻き込んで



ファシリテーター養成講座

養成講座をとおして、プログラムについてたくさんの方々からアドバイスをいただいたことに何よりも感謝しています。「計画段階から**さまざまな人を巻き込む**ことで、**より良いプログラムづくりができる**」と実感しました。今、新たに担当となった事業の要項づくりも一人で抱え込むのではなく、まわりの人に意見をもらいながら進めています。

「吉賀町のくらしがもっと良くなるように」、自分自身も楽しみながら多くの方と関わって「だれもが安心して暮らせる福祉のまちづくり」をめざしていきます。

社会教育から得た学びを、福祉の現場で活かしておられる澄川さん。「誰かのために働きたい」という思いからこの職業に就いたそうです。講座中、笑顔で明るくファシリテートされる姿は、相手に安心感を与えていました。これからも多くの人を巻き込みつつ、「だれもが安心して暮らせる」ために、たくさんのおもいや考えを引き出しながら「福祉のまちづくり」を進めていかれることでしょう。

# 社会教育の実践紹介



## “TEAM飯南”としての公民館活動

### ～合同主事研修から5館共催事業へ～

飯南町教育委員会 派遣社会教育主事 若槻 慎也

飯南町には、公民館が5館あり、それぞれの地域の特色を生かしながら公民館活動を展開しています。

昨年度、春から夏にかけて、新型コロナウイルスの影響で公民館事業の中止が相次ぎました。そんな中、“こんな時だからこそ地域資源を見つめ直そう”と自主研修を企画しました。ウォーキング、サイクリング、やまめ釣り、ベンチ作り、登山とアクティブに活動しました。地域資源を再発見するとともに、主事同士のつながりを充実させることができました。また、サン・レイクでサバニ体験、危機管理研修も行いました。

そして、今年度、小学生を対象とした5館共催事業を計画しています。館長、主事の10名が中心となり、企画立案を行っています。意見を出し合い、考えたのが“いかだ作り”。飯南町の豊かな自然の中で、友だちと意見を出し合いながら作りたいかだはきっと子どもたちの心に残ると思います。また、5館共催事業を通して、“TEAM 飯南”として公民館が一つとなり社会教育を推進します。

子どもたちだけでなく、公民館職員にとっても夏の特別な思い出になるような1日になればと思います。



主事自主研修



事前のいかだ製作

飯南町におじゃますると、まず目を引かれるのは、主事さんたちの明るさです。フレッシュライムの果汁が飛び散るようです。そして、それを温かく、優しく見守っている館長さん。そつと寄り添う教育委員会。こんな時期にもかかわらず、自分たちも楽しみながら、前を向いてどんどん活動されている飯南町の皆さんを見ると、なんだかワクワクします。

(出雲教育事務所 社会教育スタッフ企画幹)



## 小学校振替休業日支援事業「すみえっこクラブ」

谷住郷まちづくり協議会 会長 森脇 専二  
地域マネージャー 今田 絵里花

谷住郷まちづくり協議会では、公民館時代の平成19年から始めた小学校振替休業日支援事業「すみえっこクラブ」を毎年4,5回開催しています。

この事業は、谷住郷の子どもたちに地域への愛着心を深めてもらうため、小学校の振替休業日にセンターを一日開放し、地域の大人や年齢の異なる子どもたちと一緒に地域の「ひと・もの・こと」にふれる体験活動を行うものです。

これまでの活動では、地域の伝統産業であるお茶摘み体験や地域にあるお寺での座禅体験、近くの川へ遊

びに出掛けたり、地域の食生活改善推進員さんと郷土料理を作ったりしてきました。自分の住んでいる地域を大好きになってもらいたいという思いで、地域の方々との協力のもと楽しく継続しています。

近年は子どもの数も少なくなっており、協力してくださる方が固定化してきたなどの課題もありますが、「こんにちは～!!」と来てくれる子どもたちのためにもいろんな人を巻き込みながら、なが～く続けていきたいと思っています。



お茶摘み体験



お寺での座禅体験

谷住郷地域コミュニティ交流センターを訪れると、いつも子どもたちの元気な声が聞こえます。また、2月に開催された防災食の訓練でも、親子連れの参加者が多く見られました。これは、「すみえっこクラブ」をはじめとした地域の方々の取組により、センターを中心として谷住郷で子どもと大人が交流する文化が定着しているからだと思います。

(江津市地域振興課 課長補佐)



しまね学習支援プログラム第3弾「地域魅力化プログラム※」  
活用の様子をお伝えしている「つながる ひろがる “わ”」、  
今回は、雲南市社会福祉協議会(掛合支所)の取組を紹介します。



## 「中学生と共に地域課題を見つめる」

～福祉学習(総合的な学習の時間)を通して～

雲南市社会福祉協議会では掛合自治振興会(地域自主組織)・掛合中学校と意見交換を重ねながら、中学生を対象にした全3回の福祉学習プログラムを作成しました。このプログラムを通して中学生は、地域の現状を把握し、「地域の声」を聞きながら、自分たちで何ができるかを考えていきました。

## ●地域を知り、自分たちができることを考える

雲南市社会福祉協議会(掛合支所)では、例年、掛合中1年生を対象に高齢者疑似体験を行っていましたが、少子高齢化問題を含め広く地域課題について考えていく場を持ちたいと考え、教育支援コーディネーターや関係者と意見交換を進めながら学習プログラムを作成し、中学校で授業を展開しました。

第1回は、地域のデータ(実態・人口予測・住民アンケート)から、自分たちの地域の様子を読み解き、特徴をつかむ活動(ラベルワーク)を行いました。

そして、第2回では、掛合自治振興会の地域福祉推進員さんから地域のよさや課題を聞き、前回つかった特徴と関連付けながら考えを深める活動(ブレインストーミング+イメージマップ)を行いました。地域福祉推進員さんの「雪かきをしてくれる人が随分少なくなった」という話を聞いた中学生から、人口減少の他にも、「地域行事に参加する人が少ないことも関係しているんじゃない?」といった意見が挙がり、現状と課題を関連付け、さらにその原因について考えを深めていく



様子が見られました。

第3回では、課題に対して自分たちが何ができるかを話し合う活動(ラベルワーク)を行いました。全体発表では「サロン活動を行ってみる」「川の魚を集めて水族館をつくる」「地区でギネス記録に挑戦!」「地域のひと主演の映画を制作」など高齢者も巻き込みながら地域が元気になる活動案が提案されました。

この活動の様子を聞いた掛合自治振興会の関係者の方は、中学生のアイデアに感謝をするとともに、提案をカタチにしていきたいという思いを強くしました。



## ●楽しみながら本気を引き出す

この活動を支援された雲南市社会福祉協議会の畑 昌宏さん(現:三刀屋福祉圏域担当)は、令和2年度ファシリテーター養成講座に参加されました。今回、全3回の学習プログラムを作成されるにあたり、「中学生が楽しみながら地域について考えていくうちに、中学生の本気を引き出したい」という願いを持って取り組んでこられました。第1回で「分析する」、第2回で「地域課題と紐付ける」、第3回で「表現・発信する」という学習の流れから中学生の学習意欲がだんだんと盛り上がっていったことが分かります。

畑さんがコーディネーターとなり中学生と地域をつないだことがきっかけで、お互いの本音から本気を引き出すことができ、さらに地域全体で元気で活気あふれるまちづくりをしていこうという今後の動きにつながる実践になっています。これからも楽しみです。



社会教育課  
派遣社会教育主事  
藤原 枝理子

※「地域魅力化プログラム」とは、地域づくりに主体的に参画する人づくりを支援・推進するために、参加型学習の手法を用いた学習支援プログラムです。当センターホームページから閲覧・ダウンロードできます。

### 東部社会教育研修センター

〒691-0074 出雲市小境町1991-2 サン・レイク2F  
Tel.(0853)67-9060 Fax.(0853)69-1380

URL: [https://www.pref.shimane.lg.jp/tobu\\_shakaikyoku/](https://www.pref.shimane.lg.jp/tobu_shakaikyoku/)  
E-mail: [tobu\\_shakaikyoku@pref.shimane.lg.jp](mailto:tobu_shakaikyoku@pref.shimane.lg.jp)

### 西部社会教育研修センター

〒697-0016 浜田市野原町1826-1 いわみーる3F  
Tel.(0855)24-9344 Fax.(0855)24-9345

URL: [https://www.pref.shimane.lg.jp/seibu\\_shakaikyoku/](https://www.pref.shimane.lg.jp/seibu_shakaikyoku/)  
E-mail: [seibu\\_shakaikyoku@pref.shimane.lg.jp](mailto:seibu_shakaikyoku@pref.shimane.lg.jp)

第34号は  
2月末  
発行予定